

変化している予防接種について

『麻疹と日本脳炎』

もとはしクリニック

本橋 和夫 先生

予防接種は各種の感染症に対して、感染予防、発病防止、病気の蔓延化防止などを目的に行われます。最近では成人における麻疹や百日ぜきの流行があり、予防接種の重要性が再認識されています。また、破傷風は致死率の高い疾患で、高齢者を中心に年間100人以上の患者発生があり、未接種の人はいつでも感染する危険性があります。

麻疹は1週間ほど高熱の続く重症の疾患ですが、約1,000人に1人の割合で脳炎をおこし死亡することもあります。2012年の麻疹排除(国内に麻疹ウィルスのいない状態)を目指して、今年の4月から13歳と18歳を対象に5年間にわたり、MRワクチンの接種が開始されました。今回は接種率を上げるために集団接種も可能になりました。このため県内初めての試みとなりますが、太田市では市立の中学1年生に、学校医の先生に協力いただいて、学校での集団接種を行っています。また、かかりつけ医による個別接種も受けられますので、どちらかを利用してワクチンを受けてください。最近の研究で、子どもの時代に1回だけ、麻疹ワクチンを受けた今の20代から30代の世代では、約20%の人に麻疹抗体の低下がみられ、この人たちとワクチン未接種者の間で麻疹が流行しています。今年だけでも県内で82人の感染が報告されています。2回目のワクチン接種で麻疹抗体は上昇し感染を防ぐことができます。

日本脳炎のワクチンについては、2005年に副作用をめぐって大きな混乱があり、この時点で以前のワクチンの製造が中止されたため、現在、日本脳炎ワクチンはほぼなくなっています。最近では日本脳炎の発症は小児から40代までも認められています。ワクチンの開発される昭和41年までは年間1,000人を超える患者発生がありました。来年以降になりますが、新しいワクチンが承認されれば早期に接種していただきたいと思います。